
木之本ジュンの華麗なる推理！ 2殺目（河野裕一の事件簿より）

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木之本ジュンの華麗なる推理！ 2殺目（河野裕一の事件簿より）

【Zコード】

N6116A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

1年前に女性が自殺・・・そして復讐・・・その後は・・・

序章

1年前の6月6日PM・9:30。

此処に、とある一軒家がある・・・。

この一軒家にはある女性が住んでいた・・・。

女性の名は、高山 春海 たかやま はるか 24歳 独身 ・・・。

今、女性が自殺をしようとしている・・・。

女性は、台と首を吊る為のロープを用意した・・・。

そして、女性は台に乗り、ロープを首に掛け、台をどかした・・・。

女性は、呼吸が出来なくなり、やがて、死に至った・・・。

温泉旅行

朝起きて、歯磨いて、風呂入って、朝食を摂りながらテレビを見る。それがジユンの日課。

「ピンポーン」と、自宅のチャイムが鳴る。

ジユンは、インター ホンを取る。

ジユン：「はい、どちら様ですか？」

裕一：「俺、裕一だけど。」

ジユンは、受話器を置くと、玄関へ向かつた。

ジユン：「何か用？」

裕一：「いきなりで悪いんだけど、温泉旅行に行かないか？」

ジユン：「何で？」

裕一：「実は、旅行券が余ったんだよ。4組の真理ちゃんに誘われていたんだけど、親の都合で行けなくなつたらしいって言つんで、一枚くれたんだ。だから、その……。」

ジユン：「良いよ、行こう？」

裕一：「ああ。」

ジユン：「で、何時なの？」

裕一：「えーと、明日だ。」

と言つ事で翌日。

ジユンは旅行へ行く準備をしていた……。

まあ、旅行と言つても日帰りの温泉旅行だからそんなに必要は無いだろう……。

そして、準備を終えたジユンは待ち合わせ場所の東京駅に向かつた。

ジユン：「じめーん、待つた？」

裕一：「1秒遅刻。」

ジユン：「1秒つて、そこまできつちつ合わせなきゃいけないんか

い！？」

裕一：「うん。」

ジユン：「す、ストレート過ぎ……。」

裕一君さあ、もう少し、優しい人間になつたら？
そんなんじや、女の子に嫌われるよ？」

裕一：「お前が言うな。」

ジユン：「酷い……。」

折角楽しみにしてたのに……。

あたし、帰ろうかな？」

裕一：「じょ、冗談だつて！」

と、兎に角、早く行かないと間に合わなくなるぞ？」

と言う訳で、二人は電車に乗り、温泉旅館へ向かつた……。

乗つてから2時間くらい経過しただろうか、電車は目的の駅に到着

した。

二人は、駅から旅館までの間を走つている無料送迎バスに乗つた。
そして、数分が経つた頃、バスは旅館に辿り着いた……。
だが・・・・・・。

ジユン：「これつて本当に旅館なの？」

裕一：「旅行券によるとそうなつてるが……。」

それにも、やけにボロイな……。」

ジユン：「ま、折角来たんだし、入つてみようよ！」

裕一：「そうだな……。」

二人は、そのボロ旅館に入つて行つた……。

温泉旅館殺人事件！

二人は部屋にいた・・・。

ジュン：「裕一君、あたし、お風呂入つて来るね。」

裕一：「じゃあ、俺も風呂に入つて来るよ・・・。」

ジュン：「それじゃ、途中まで行きましょ？」

裕一：「ああ。」

二人は、別館にあるお風呂に向かつた・・・。

ジュン：「ねえ、混浴があるわよ？」

裕一：「だから？」

俺はお前と入る気はサラサラ無いよ。」

ジュン：「ちつ。」

と、舌うличの様な物が聞こえた。

裕一：「お前、俺と入りたいのか？」

ジュン：「そんな事、ある訳、無いじゃない！」

と、言い残し、女風呂の方へ、入つて行つた。

ジュンは、服を脱ぎ、タオルを持つて浴場に入り、体を洗つて浴槽に入つた・・・。

ジュン：「はあ、極楽極楽。」

と、おばさんの様な事を言つた・・・。

だが、そんなひとつとも束の間・・・。

男湯の方で「うわー！」と悲鳴が聞こえた・・・。

男湯には、野次馬が集まつて來た・・・。

皆、我を忘れ、服装など気にしていない。

中には、裸の女性客もいた・・・。

そして、ジュンが何があつたのかと、バスタオルを身にまとい、駆けつけてくる・・・。

ジュン：「何があつたんですか？」

女性：「事件があつたんですねって。」

男性：「温泉で自殺とは・・・。」

そして、ジユンが奥に歩み寄ると、裕一が遺体を調べていた・・・。

裕一：「皆さん・・・これは自殺じやない。

巧妙に見せかけられた殺人だ！」

と、裕一が真剣な眼差しで言つた。

程なくして、裕一の通報により警察が現場検証に入つて來た。

桐山刑事：「神奈川県警の桐山です。」

と、一人の刑事が警察手帳を見せながら言つた。

そして。

桐山刑事：「第一発見者はどなたですか？」

すると、一人の若者が声を掛けた・・・。

裕一：「僕ですよ。」

なんと、裕一が第一発見者！？

裕一は、刑事に事件当時の事を話した・・・。

桐山刑事：「それじゃ、君が最初に見つけたんだな？」

裕一：「ええ。」

桐山刑事：「それで、遺体には触つていらないだろうな？」

すると、裕一は遺体の状況を説明した。

裕一：「被害者の死亡推定時刻は本日P.M. 3:00。

死因は、手首を剃刀かみそりで切つた事による出血死。

それ以外に目立つた外傷はありません。」

桐山刑事：「成る程、そこまで知つていると、君が怪しく見えて來たな。

取りあえず、詳しい事を聞くから署まで来い！」

と、桐山は裕一を連れて行つてしまつた・・・。

ジユン：「ゆ、裕一君！？」

裕一は、瞬く間に刑事とともに姿を消した。

その時、ジユンは自分の肌とタオルの間に何かが挟まつてゐる事に気づいた。

ジユン：「（何かしら？）」

それは、裕一の残した被害者の死因やらにやらが詳しく書かれた物だった・・・。

物だった……

恐りしく、ジョンに事件を解決して貰おうとしたのですが、…。

ジョンはそれを読んだ。

遺体の状況

死亡推定時刻はPM 3:00。

左手首損傷

死因は静脈切断による出血死

凶器は弟アレ

遺体は、左手首に傷が付いているのに、左手で剣刀を持っている事

から、俺は殺人と判断した。

眞犯人が見つかるまで俺は出でられないかも知れない。

後に任せた

ジョン：「（後は任せたつていいすれば……。）
ん、まだ続きがあるわ。（」

解らなくなつたら今までの事を整理しろ！

これでは余計意味が解らない・・・。

このなので本当に解決出来るのか?

その後、警察の調べで、被害者の名は「高宮 明」と解った。・・・

そして、その被害者の友人達が当旅館にいると言う事も解った。

事情聴取

ジュンは、名前は出せないが、とある博士に作つて貰つた盗聴機を使つて、取調べの様子を盗聴していた。・・・。
取調べを受けるのは4人である。

桐山刑事：「では、まず君の名前から。」

と、刑事は被害者の友人である男性に名前を尋ねた。
害者の友人は、「小島 恒彦^{つねひこ}」と名乗った。

小島は、被害者とは大学の友人で連れの者と一緒に旅行へ来ていた
と言つ。

桐山刑事：「小島さん、最近、被害者に変わつた所はありましたか
？」

恒彦：「変わつた所ですか？
特に無かつたですね。」

いや、待てよ・・・。

そういうえば昨日、愛美^{まなみ}と酷く争つっていたな・・・。
え、酷く争つていた？

桐山刑事：「それは何時ごろですか？」

恒彦：「夜中だよ、夜中。」

多分、2時頃だったかな・・・。

俺、トイレに目が覚めて、戻つて来たら隣の部屋で一人が争つてい
たんだ。」

桐山刑事：「そうですか。」

因みに、PM:3:00頃、貴方はどこにいましたか？」

恒彦：「お、俺を疑つてるのか刑事さん？
俺は3:00頃は部屋にいた。」

そこで、悲鳴が聞こえたんで、浴室に行つたんだ。
それだけのことだ。」

桐山刑事：「ありがとうございます。」

そう言つて、桐山刑事は次の人に呼んだ。

桐山刑事：「では、貴方のお名前を教えて下さい。」

そう言つと、その人は答えた。

愛美：「黒田 愛美。」

桐山刑事：「貴方、夜中の2時頃、被害者の高畠さんと酷く争つていたそうですね。」

愛美：「てめえ、俺を疑つてんのか！？」

どうなんだ、ああん！？」

極度の俺つ娘だ・・・。

桐山刑事：「そんな事はありません。」

それより、君は女性なんだから女性らしくしたらどうなんだい？」

愛美：「うるせえよ！」

俺がどんな性格だろ？とてめえには関係ねえだろ！」

桐山刑事：「そうですね・・・。

（やれやれ・・・。）

因みに、今日のPM・3・00頃はどうで何をしていましたか？」

愛美：「PM・3・00頃？」

そんな事一々覚えてねえよ。」

桐山刑事：「そうですか・・・。」

そ言つと、桐山刑事は黒田を解放し、次の人物を呼び出した。

次の人物は、「影山 紀夫」と名乗つた。

桐山刑事：「影山さん、貴方はPM・3・00頃、どうしていましたか？」

紀夫：「僕は、黒田さんと一緒に部屋にいました。実は、僕と黒田さんは付き合つてゐるんです。」

聞いて無いつて！

桐山刑事：「そうですか・・・。」

では、最近、被害者に変わつた事はありますか？」

紀夫：「いや、無いですね。」

桐山刑事：「そうですか。」

そう言つと、桐山刑事は影山を解放し、4人目の人物を呼び出した。

4人目は、「武山 薫」と名乗つた・・・。

名前からして女っぽいが一応男だ。

桐山刑事：「貴方はPM・3・00頃、何処にいましたか？」

薫：「3・00頃？」

覚えてないなあ・・・。」

桐山刑事：「最近、被害者に変わつた所はありますか？」

薫：「そう言つのは、解らないです・・・。」

僕、彼とは余り親しくないので・・・。」

今のところ、影山さんと黒田さん以外にアリバイは無い様だ・・・。

それはそうと、裕一はどうなつたのだろうか？

ちょっと、県警の様子を覗いてみよう・・・。

刑事A：「なあ、正直に吐いちまえよ？」

お前がやつたんだろ？」

裕一：「僕はやつてませんよ。

1・0・0・0歩譲つて僕がやつたとしましょう。」

1・0・0・0歩？

100歩の間違いじや・・・。

裕一：「動機は一体何なんですか？」

刑事A：「動機は、まあ、あれだ。

被害者と偶々ぶつかつて口論となり、勢いで殺害してしまつた・・・。

そんな所だな。」

裕一：「じゃあ何で凶器がカミソリなんですか！？」
勢いで殺害すんなら凶器なんか使いませんよー！」

刑事A：「た、確かに・・・。」

そこへ、「コンコン」と、誰かが扉を叩く。

刑事は入れと言つた。

すると、刑事が入つて來た・・・。

刑事B：「おい、何やつてる！？」

そのお方を誰だと思つてゐるんだ！？

刑事A：「誰つて、遺体の事に詳しかつたんだから犯人に決まつて
るだろ、う。」

刑事B：「そのお方は本庁の捜査一課の河野警部殿の息子さんで現
役の名探偵さんだ！」

その様なお方が殺人を犯す訳が無いだろ！？

刑事A：「何、本庁の！？」

刑事は焦つたが、直ぐに冷静になり裕一に謝つた。

刑事A：「も、申し訳御座いませんでした！」

貴方があの有名な名探偵殿とは存じ上げず犯人と疑つてしまいと
んでもないご無礼を・・・。」

裕一：「か、顔を上げて下さい。

そんなに謝られても困ります！」

刑事A：「いや、これぐらいはないと私の気が済みません！」

裕一：「いやいやいや、もうそれだけで充分ですので顔を上げて下
さい。」

刑事は、漸く顔を上げた。

そして、「何かする事はありますか」と、聞いて來た。

裕一は、「事件現場へ行かせて下さい」と答えた。

さて、舞台は旅館へ戻り、ジュンは取り調べで得た情報をまとめて
いた・・・。

ジュン：「（えつと、影山さんと黒田さんを除外すると、
残つたのはアリバイの無い小島さんと武山さん・・・。

しかし、武山さんは被害者とは親しくないと言つていた・・・。

そして、小島さんは・・・。

あっ、解つたわ！

犯人はあの人！）

ジュンは、桐山刑事と4人の容疑者に話があると、ロビーに集めた。

事件の真相（前書き）

此処から犯人の名前が出ます。

事件の真相

ジュンはロビーにいた……。

愛美：「おいおい、お前なあ。

俺らをこんな所に呼び出して何をしようって言つんだ？」

薰：「そうですよ。

一体、何が目的なんですか？」

桐山刑事：「お嬢ちゃん、我々警察は今忙しいんだ……。
お遊びに付き合つてる暇は無いんだよ?」

ジュンは、そう言つて「直ぐ終わる」と言った。

恒彦：「本当に終わるんだろ? なあ……。
で、話つて何だい？」

早く話してくれよ……。」

ジュンは、「犯人が解つた」と告げた。

紀夫：「それ、本当なんですか?」

ジュン：「私は嘘で人を集めたりんかしません。
良いですか、犯人はこの中にいます！」

そして、犯人は小島 恒彦さん、貴方です！

貴方は事件当時、被害者を浴場で殺害した後、部屋には戻らずその
場に残つた。

恒彦：「待つてくれ。

何で僕が彼を殺さなくてはいけないんだね？

第一、犯行のあつた時間は部屋にいたんですよ？

殺せる訳無いじゃないですか。」

桐山刑事：「そうだよお嬢ちゃん。

さつき、小島さんのいた部屋からお風呂場までの時間を計つたが、
軽く10分は掛かったぞ？」

ジュン：「刑事さん、犯行のあつた時間、彼は部屋にはいませんでした。

それを証明するのは、『悲鳴』ですよ。」

恒彦：「そ、その悲鳴が何の証拠に？」

ジュン：「わざと、小島さんと浴場までの時間は10分だと言いましたね。」

そう考えると可笑しいんですよ。

移動するのに10分掛かる所で浴場の悲鳴が聞こえますか？

いいえ、聞こえません。

それに、浴場は別館にあるんですよ？

どう考へても聞こえる筈がありません！

つまり、貴方は犯行時刻に現場にいた……。

そうですよね、小島さん！」

小島は、その場に膝を付いた……。

恒彦：「あいつが悪いんだ。

1年前、俺はある女性と婚約していたんだ……。

だが、高富の奴がその子に言い寄つて、彼女はそれが嫌で自殺してしまったんだ……。

首を吊つてな……。

だから、俺は高富を自殺と見せかけて殺したんだ。

だが、とんでもない所でミスつちまつたなあ……。

右手に持てせれば良かつたのに左手に持たせて……。

それに、悲鳴の事もなあ……。」

小島は、全てを話し終えると、刑事に手を差し出した……。

刑事は、小島に手錠を掛けた……。

そして、小島は逮捕され県警に連行されて行った……。

こうして、事件は解決して幕を閉じた……。

ジュン、名推理だつたぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6116a/>

木之本ジュンの華麗なる推理！2殺目（河野裕一の事件簿より）
2010年10月10日19時22分発行